



毎日グラフ別冊「雲仙・普賢岳全記録」より 92年1月22日 深江町大野木場

仮説住宅に住む元の飼い主より「連れてくる場所がないのでなんとかできないでしょうか。」と依頼され2月に「救う会」に引取る。子犬4匹は無事里子に旅立ち、現在母親「カンコ」が里親さんを待っている。

終りに

私たちが今最も気掛かりなことは、現実にもまだまだ多くの動物たちが放浪しているということです。徐々に警戒区域が緩和され、それに伴い被災者が自宅や田畑に戻っています。そうした中、これまで私たちのエサやりで生き永らえてきた動物たちが住民にとって目障りな存在になりつつあるのです。放浪していた犬が針金で首を吊られ死ぬということさえ起こっています。日本の社会は動物にはとても不寛容です。彼らが人間に喜びを与えるということに限りその存在が認められるからです。公正であるべき法律でさえ公然と彼らの生の権利を妨げています。心ある人たちからは怒りと諦めの声が聞こえてきます。私たちは「生命の尊厳」がまじめには考えられない時代に生きているのです。動物の生命の尊さ、魂の喜びや苦痛、心の世界を考える者は非現実主義者、現実の厳しさを見通せない甘い、感傷的な理想主義者と嘲笑しています。それでいて自分の食欲な喜びだけは現実なのです。思考においても感情においても意志や行為までも物質主義に浸っています。多くの知識人もまた感情の世界や生命の世界を現実の中に位置づけることができない段階に留まっています。私たちの意識は長い回り道の末今ようやく人間の自由・平等・友愛に目が向けられてきたところなのです。苦痛を伴う動物についての思考は一部の人々にしか耐えられないものです。植物に至っては私たちの存在さえ危ういものになりかねません。内面の訴えに促されつつも、詭弁をまとうことを忘れられない人々が唯一安心できるのは「植物の破壊や動物の種の絶滅は結局自分で自分を窒息させる行為だ!」と語る時です。利害関係の中でのみ動物や植物の現実的な有益さが取りざたされるのです。そうした物質の背後に隠れた感情や生命の本質を軽視する傾向が、動物の生命や感情そのものから目をそらさせ、人間生活に動物が害をもたらす時、実利的に彼らの駆除を優先させる原因になっています。私たちの活動は、「彼らを保護することが結果的に人間生活の利益につながる」という利己主義的な意図とは何の関係もないものです。私たちが彼らの生を尊重したり、他の人々が彼らに救助の手を差し延べることそのものが喜びであるような活動です。現在私たちは様々な動物を犠牲にして生きるという矛盾を抱えています。しかし私たちが求める社会は、他者（動物）の犠牲によって初めて人間生活が成り立つような他者依存型の不自由なあり方ではなく、自立した真の自由を目指すものです。今はまだこうした理想からは程遠い段階ですが、一歩ずつみなさんといっしょに歩むことができれば幸いです。それがこれまで人間を支えてきてくれた動物への義務を果たすことにつながることを願っています。

（八五）電話（ふたご）六〇四三番

雲仙被災動物を救う会

長崎県島原市新馬場町一六四一

カンパの送り先一郵便振り替え口座 長崎8-31791

雲仙被災動物を救う会